

アーティストおよび会場紹介

六甲ケーブル(六甲ケーブル下駅・山上駅)

(1組)



六甲山への玄関口である六甲ケーブルは、麓の「六甲ケーブル下駅」と山上の「六甲山上駅」の間を繋ぐ路線です。創業90年以上の歴史を持ち、開業当時の面影を残す「六甲山上駅」駅舎は近代化産業遺産にも指定されています。

ニシハラ☆リオ×北園組

かぶりもの作家ニシハラ☆リオと音楽家北園組によるユニット。2026年結成。

ニシハラ☆リオ

美術制作会社で10年の勤務を経て、2004年より“被る、という行為をコンセプトに独自の表現で“カブリモノ、をメインに制作活動を開始。2007年『かぶれる展示』と題し、自由にかぶれる参加型展示を金沢21世紀美術館で開催。これまで日本各地・パリ・ロンドン・マドリッドで行う。近年は舞台美術・ワークショップ・インスタレーションなど制作範囲を広げ活動中。

北園組

北園優と北園あかねによる兄妹ユニット。兄の北園優は、奇才のピアニストでありながらひとところに留まらず、世界一小さなサーカス団『山猫団』の七代目団長であり、唄う踊る雑芸レビュー団『デリシャスウィーツ』では愉快的オルガンプレイヤー。スペシャルチンドンバンド『ジュンマキ堂とニューパラダイスチンドン』ではアコーディオンと盛り上げを担当。民謡が得意の歌舞伎好き。妹の北園あかねはオペラ歌手でありながら兄の無茶な芸術活動に協力している。神戸市出身。



天覧台

(3組)



六甲ケーブル 六甲山上駅すぐにある六甲山の代表的な眺望スポットのひとつで、標高737mからの眺めとともに作品を楽しめます。1981年(昭和56年)5月25日に昭和天皇がお立ち寄りになられたことを記念して、「天覧台」と名付けられました。

井上涼

1983年 兵庫県出身、東京都在住

2007年 金沢美術工芸大学美術工芸学部デザイン学科視覚デザイン専攻卒業

2013年より世界の美術を歌とアニメで紹介するNHK Eテレの美術番組「びじゅチューン！」で作詞、作曲、歌、アニメを担当。

2016年から2024年まで毎日小学生新聞でまんが「井上涼の美術でござる」を連載。全国各地の美術館で展覧会を行っている。

他の作品に「赤ずきんと健康」「確信」などがある。



ジュン・グエン＝ハツシバ

1968年 東京都出身、ホーチミン(ベトナム)およびヒューストン(アメリカ)在住
1994年 メリーランド・インスティテュート、マウントロイヤル美術大学修士課程修了

1968年、東京にて日本人の母とベトナム人の父の間に生まれ、幼少時代を日本で過ごした後、アメリカで教育を受ける。
2001年より難民や社会的少数派をテーマに取り上げた「メモリアルプロジェクト」シリーズを発表、国際的に注目を浴びる。ヴェニス、イスタンブール、シドニーなどで開催されるビエンナーレ・トリエンナーレの国際展に参加。グッゲンハイム美術館(ニューヨーク)、ホイットニー美術館、ポンピドゥーセンター、森美術館などに作品が所蔵されている。



宮 浩浩

1982年 大阪府出身、滋賀県在住
2007年 立命館大学理工学部土木工学科卒業
2018年 関西大学大学院文学研究科 総合人文学専攻 教育学専修 博士課程前期課程修了

アーティスト／教育者。
場所や素材、記録といった具体的な手触りを起点に、不可視の現象や時間の層を扱うインスタレーション作品を制作している。
旅や身体的体験から立ち上がる感覚を起点に、世界を「味わう」ことを大切にし、その場に生まれる気配や記憶の重なりを探求している。



兵庫県立六甲山ビジターセンター(記念碑台)

(2組)



六甲山の歴史、自然などの魅力を学べる施設で、ハイカーの憩いの場として親しまれています。六甲山開発に尽力した英国人アーサー・H・グルーム氏を讃える碑があったため、「記念碑台」とも呼ばれます。

朱志康

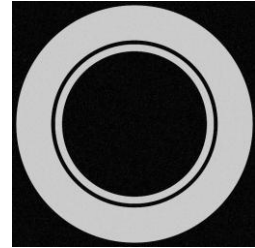
1976年 台湾台南出身、台湾高雄在住
2007年 實踐大學デザイン学部プロダクト・建築デザイン修士課程修了

朱志康空間規劃・有関文化 創設者。
朱志康氏はアートとデザインを横断し、「現代の新東方思維」を掲げ世界的に活躍するクリエイターです。国際賞を多数受賞し、ヴェネツィア・ビエンナーレでも作品を展示するなど、トレンドの指標として注目を集めています。代表作「無関実験書店」はCNN等で報じられ、「アジアで訪れるべき書店」と称賛されました。鋭い洞察力と真実を追求する姿勢により、設計を感情の触媒へと昇華させ、人々の記憶に響く深い空間体験を創り出しています。



Ryuichi Ono

Filmmaker / Artist。兵庫生まれ、東京を拠点に活動。3DCG、実写、電子工作を横断的に用い、映画やMV、舞台演出、インスタレーションなど、映像表現を主軸に幅広く活動を展開している。
近年の主な作品に、《顛杵 (Sensho)》、《VoF (Vibro-Optical Field)》などがある。



バンノ山荘

(2組)



六甲山の歴史が垣間見える別荘建築「バンノ山荘」と「バンノ山荘ハナレ」で作品を展示します。
普段は立ち入ることのできない特別な展示空間です。

古巻和芳

1967年 兵庫県出身・在住
1989年 神戸大学経営学部商学科卒業

宝塚市で呉服屋の息子として生まれる。1990年代から花をモチーフとした絵画作品を制作。

2006年に越後妻有アトリエンナーレ「養蚕プロジェクト」への参加以降は、港都KOBÉ芸術祭など国内各地の地域芸術祭で土地の「記憶」をテーマにしたサイトスペシフィック作品を発表してきた。

近年は、養蚕に縁が深い桑の木を素材に人物像を彫ったことがきっかけとなり、「skywalker」と名づけられた糸の上に佇立するバランス彫刻を手がけている。



Photo by 井上さおり

鈴木泰人

1979年 神奈川県出身・在住
2011年 多摩美術大学 大学院美術研究科 絵画専攻 修士課程 修了

光や音、空間、場所性をテーマに、ふだんは意識されにくい事象を手がかりとして制作している。絵画を出発点に、「はかる」「ならべる」「記憶する」といった行為を制作の軸とし、人々の記憶や気配など目に見えない要素を形や音へと置き換えてきた。近年はリサーチや滞在制作を通じて音を集め、それらを組み合わせ直しながら作品へと展開している。展示や発表、トークを通じて、体験を他者と共有できるかたちへとひらいている。



ミュージアムエリア (ROKKO森の音ミュージアム・六甲高山植物園・新池)

(28組)



ROKKO森の音ミュージアムでは、「SIKIガーデン～音の散策路～」各所に作品を展示します。SIKIガーデン奥には会期外もアート作品を楽しめる「野外アートゾーン」も。また、隣接する六甲高山植物園では10月下旬～11月下旬には園内の木々が赤や黄色に色づき、秋らしい風景とともに作品鑑賞が楽しめます。新池はROKKO森の音ミュージアムの入口付近にあります。

Shohei Takasaki

1979年 埼玉県出身、シドニー在住

Takasakiは、絵具や木炭、布地やファウンドオブジェクトなど多様な画材を用い、大胆な色、線、形によって認識可能なモチーフと抽象の間を行き来するイメージを描いてきました。人物画を中心とした近年の作品には、炎、短剣、植物、格子模様や頭蓋骨などのモチーフが繰り返し現れ、生と死、自然、ジェンダー、暴力等を想起させるイメージを通して、Takasaki自身を取り巻く現実世界への愛と拒絶の間にある感覚を表現しています。



Photo by Asuka Ito

橋本圭央

高知県出身、東京都在住

2008年 AAスクールDiplomaプログラム修了

2025年 東京藝術大学大学院研究科博士(学術)

身体・建築・都市スケールを包摂したノーテーションをもとにしたデザインリサーチの実践をおこなう。スケールを包摂する際に、それらの媒体である日常性、媒介情報としての日常の移動や活動の軌跡、領域、感覚などに対する多様な考察・記述から、今後の身体・建築・都市の関係性のあり方を探求している。



宮下ゆり

1999年 新潟県出身、京都府在住

2023年 京都精華大学芸術学部造形学科立体造形専攻卒業

人々から提供を受けた衣服や繊維を用いて、「根」をモチーフとした作品を制作している。それぞれの素材を、かつての持ち主たちの記憶や時間が宿る人生の断片として捉え、それらを重ね合わせ根の形へと立ち上げることで、過去と現在、そして人と人との繋がりを表現する。



山本修路

1979年 東京都出身、千葉県在住

2005年 多摩美術大学油画専攻卒業

「大自然と人間の関わり」をテーマに日本各地でフィールドワークを続け、森に入りカエデの樹液を採取して作るメープルシロップ、米作りから携わる酒造り、林業についての考察や木材利用の歴史研究など、その活動は多岐にわたる。



Daisy Balloon

2009年 ユニット結成 神奈川県在住

バルーンアーティスト細貝里枝とアートディレクター・グラフィックデザイナーの河田孝志からなるアーティストユニット。2009年結成以来、「感覚と質」をテーマに掲げ、バルーンで構成された数々の作品を制作。それらは繊細さが細部まで行き渡った建造物を思わせる。また、彼らは日々、哲学を探求し、ディスカッションすることをフィールドワークとしているが、その眼差しは常に、他者との本質的な融合に向けられている。



Photo by Sai

宮永甲太郎

1969年 京都府出身・在住
1992年 金沢美術工芸大学美術工芸学部美術科彫刻専攻卒業

京都の窯元の家で生まれる。日常性を持つ陶芸に囲まれる日々から、非日常的な西洋美術にあこがれるようになり金沢美術工芸大学 彫刻専攻に進学。迷いながらも無事、4年間で卒業する。陶芸と彫刻を知った事により、工芸や美術に関して考えるようになるが、その答えのなさで迷子になる。迷子になった結果、自身のルーツを解きほぐし作品を作る事を目指す。そして、現在ろくろ技法を素材と捉えて、陶を用いた作品を作っている。



船井美佐

1974年 京都府生まれ、東京都在住
2001年 筑波大学 大学院 芸術研究科修了

船井美佐は「楽園」と「境界」をテーマに、絵画によるインスタレーションを制作しています。
線描による即興のドローイングや、シェイブドキャンバスと鏡によって空間を構成するシリーズがあり、見るものがイメージの境界に入り込むような空間を作り出します。二次元と三次元、想像と現実、過去と未来を交差させることで、みえないものを形に表し、イマジネーションの力で新しい未来を形作りま



モジャヒド・ムサ

1990年 ナルシンディ(バングラデシュ)出身、ダッカ在住
2015年 チッタゴン大学美術研究所彫刻専攻修士課程修了

脱文脈化と変容の手法を用い、人間と動物の身体が置かれた社会政治的な位置付けを考察しながら本来の環境から切り離された動物の姿を通じ、文明や家畜化、そして経済システムにおける生命の「産業的副産物化」を問いかけている。また、バングラデシュ伝統の土着文化や職人の記憶を既製品やパーソナル・アーカイブと融合させることで、現代の消費社会、権力、そして自然と人間による介入の危うい境界線を浮き彫りにしている。



さとうりさ

1972年 東京都出身

1999年 東京藝術大学大学院美術研究科デザイン専攻修了

神奈川県を拠点に活動。

抽象的でありながらも親しみを感じさせる大型のソフト・スカルプチャーを、屋内外を問わず公共のスペースに出現させ、作品を通じたコミュニケーションの可能性を考察する。

特に布地を使用した空気で膨らむオブジェ作品を精力的に制作している。油土を使った模型からの型紙制作、ミシンでの縫製、全ての工程をこなす。また各所での芸術祭では、地域住民とのワークショップを通じた共同制作なども数多い。近年では絵本の制作、翻訳なども手掛ける。



Photo by Seiichiro SATO

さわひらき

1977年 石川県出身、ロンドン／金沢市在住

2003年 ロンドン大学スレード校美術学部彫刻科修士課程修了

映像・立体・平面作品などを組み合わせ、それらにより構成された空間/時間インスタレーションを展開し、独自の世界観を表現している。自らの記憶と他者の記憶の領域を行き来する反復運動の中から、特定のモチーフに光を当て、そこにある種の普遍性をはらむ儂さや懐かしさが立ち上がってくる作品群を展開している。



西田秀己

1986年 北海道出身、東京都在住

2014年 ベルゲン芸術デザイン大学芸術学部修士課程修了

ノルウェー王国ベルゲン芸術デザイン大学芸術学部修士課程修了。光州ビエンナーレ(2014年／韓国光州)、札幌国際芸術祭(2014年／札幌)ほか多数で作品を発表。ロンドン、台湾での活動を経て、2018年から2019年にかけてポーラ美術振興財団在外研修員としてモスクワに滞在。風景と人との対話を生む環境インスタレーション作家として活動するほか、舞台美術、空間デザイン、インスタレーション、パフォーマンス等も手がける。



植田麻由

兵庫県神戸市出身。六甲山麓に生まれ育ち、在住・制作。

2000年 大阪芸術大学大学院 芸術制作研究科造形表現Ⅳ(工芸)修了。

カラフルな色彩と有機的な形態でやきもの造形作品を制作し、国内外で展示発表を行う。心象が現れる心の広場を“Garden”に例えた「A Garden of Feelings」シリーズ、1995年の阪神淡路大震災から身を守ってくれたと感じる花崗岩(石)を作品化させた、石と土を共に焼く「A Lump of Feelings」シリーズなどがある。

制作の根幹となる「自然への畏敬」は六甲で生まれ、陶の表現へつながった。六甲は日常、そしてアイデンティティの一部である。



Photo by 西澤智和(ni-moc)

高橋瑠璃

1998年 東京都出身・在住
2023年 東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了

生活の中で面白いと思った人間や人間の行動をモチーフに石の彫刻を作っています。
人は知らない人と出会いながら色々な事を考えながら生活をしていて、出会った知らない人達も自分と同じように色々な事を考えていると思います。作品を見た人の、今までの思考や記憶によって、私とは違う何かを思い出してもらえると嬉しいです。



奈良美智

1959年 青森県生まれ
1987年 愛知県立芸術大学修士課程修了

1988年渡独、国立デュッセルドルフ芸術アカデミー在籍終了。ケルン在住を経て2000年に帰国。1990年代後半以降からヨーロッパ、アメリカ、日本、そしてアジアの各地で規模に関わらず様々な場所で展示発表を続ける。見つめ返すような印象的な絵画、日々自由に描き続けるドローイング作品のほか、木、FRP、陶、ブロンズ、そしてインスタレーションなど多様な素材や空間に生命を吹き込むような彫刻作品を制作。また、制作の日々や旅先での出会いを収めた写真作品も発表している。
作品はニューヨーク近代美術館、ロサンゼルスカウンティ美術館、ボストン美術館、ナショナルギャラリー(ワシントンD.C.)大英博物館(ロンドン)など世界中の美術館に所蔵されている。



Photo: Ryoichi Kawajiri
Artwork: © Yoshitomo Nara

平澤賢治

1982年 東京都出身・在住

東京とロンドンを拠点に活動する写真家、現代アーティスト。慶應義塾大学(SFC)にて人工衛星を用いたリモートセンシング技術を、英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アート(RCA)にて写真を修める。サーモグラフィーを用いて有機体が内的に発する光(熱)を捕捉する手法により、生命現象を可視化する肖像表現を確立。ポスト・デジタル時代における生命や記憶のあり方を問いかける。



高橋匡太

1970年 京都府出身・在住
1995年 京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了

光や映像によるパブリックプロジェクション、インスタレーション、パフォーマンス公演など幅広く国内外で活動を行っている。京都市京セラ美術館、東京駅100周年記念ライトアップ、十和田市現代美術館など建築物へのライティングプロジェクトは、ダイナミックで造形的な光の作品を創り出す。多くの人とともに作る「夢のたね」、「ひかりの実」、「ひかりの花畑」など大規模な参加型アートプロジェクトも数多く手がけている。



Photo by Seichiro SATO

阿部文香

1996年 神奈川県出身・在住
2020年 東京藝術大学美術学部建築科卒業
2024年 東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修士修了

生物の水晶体を光学レンズとして用いた撮影や、植物由来の感光剤による写真技法を通して、視覚を超えて体性感覚や内臓感覚へと接続する知覚を探求する。時を超えて環境の履歴を宿す器官としての水晶体に着目し、フィールドワーク、皮膚や植物、狩猟の実践も手がかりに、異なる生物や生態を知るための実験として制作を行っている。

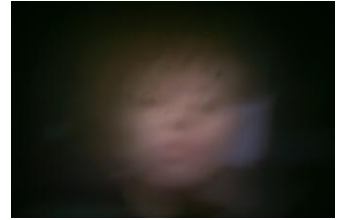


Photo by 阿部文香

則松夏凜

1998年 長崎県生まれ、兵庫県在住
2026年 京都芸術大学大学院博士課程芸術研究科芸術専攻修了

「植物と人との関係性」をテーマとしている。ゲノム編集などの科学技術で変容する植物を、人間の力を借りて進化する新たな存在として捉え、機械植物を創造して科学的研究に資する博物画の形態で描く。現在、無作為に創造され続けている風景と機械植物は未解明な点の多い存在である。実際の新大陸で新種が発見され分類、研究されてきたように、私の遺した産物(機械植物)が近未来の世界で誰かに発見される事を願っている。

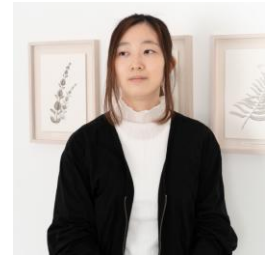


Photo by 白井茜

田口一枝

茨城県生まれ、ニューヨーク在住
2007年 バージニア・コモンウェルス大学大学院工芸科ガラス専攻修了

光を素地としたインスタレーションを制作。ヨーロッパの教会のステンドグラスにインスピレーションを受け、ガラス、鏡、反射性プラスチック、プラスチックフィルムなどを用いた、没入型で荘厳かつリラックスできる空間を作り出している。

バルセロナでステンドグラスの技術を学ぶ。2005年に文化庁新進芸術家海外学習制度でリッチモンドへ派遣され、バージニア・コモンウェルス大学大学院で修士号を取得。その後もポーラ美術振興財団の助成によりニューヨークへ渡るなど、長年欧米を拠点に研鑽を積んできた。現在は個展・グループ展のほか、ペルー・リマの現代美術館での舞台美術、ニューヨークのデザイン美術館でのワークショップ講師など、その活動はジャンルや国境を越えて多岐にわたる。



Photo by Donnelly Marks

斉藤七海

1996年 大阪府生まれ、東京都在住
2024年 東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了

陶土に害獣駆除用の金網を絡ませて焼成する手法をはじめ、「自然/人工物/自己の身体」を行き来し、それらの距離感や関係性を扱う陶芸作品に取り組む。儀式や信仰、および聖地を巡る考察を軸に据えた、国内および海外でのフィールドワークを着想源とし、青森県の恐山、鹿児島県屋久島、英国のストーンサークル、バリ島の宗教儀式など、その範囲は多岐に渡る。近年では、「身体性」という新たな主題を取り扱い、自身の身体のパーツをモチーフにした一連の作品群へと実践を展開している。



Photo by 長谷なつみ

義村環

2000年 鹿児島県出身、千葉県在住
2024年 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業

身近な植物をモチーフに、ドローイング、絵画、立体、さらには空間全体を構成するインスタレーションへと表現を拡張し続けている。絵の具や布など様々な素材を媒体とし、日常に息づく小さな生命感を鮮やかに表現している。



GR19 [galaxy route nineteen]

2023年 長野県で結成。

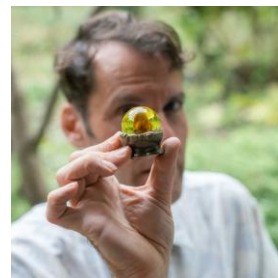
2023年に結成された長野県で活動するアーティストを中心としたアーティスト・コレクティブ。SF的想像力をベースに未来の視点から現代の課題を照らすアートプロジェクトを中心に絵画、映像、音楽、陶芸などジャンルを横断して行う。また地域コミュニティや他ジャンルアーティストとのコラボレーションにも力を入れている。メンバーは固定されておらず、プロジェクトに応じてチームを組む。今回は岩熊力也、小川格、Micciの3人で参加。



ラッセル・モーリス

ニューカッスル・アポン・タイン(イギリス)出身、神奈川県在住
セントラル・セント・マーチンズ(ロンドン芸術大学)修士課程修了

ラッセル・モーリスはイギリス出身、日本在住のアーティスト。UKグラフィティ第1世代として活動を開始し、1993年にブランド「Gasius」を設立。欧州各地の美術館・アートセンターで展覧会を行い、1949年にイギリスで設立された歴史ある公募展New Contemporariesや、ロンドンの文化拠点における選抜制レジデンシープログラムSomerset Houseにも選出。自然科学やアニメへの深い造詣を背景に、アニミズムの思想からストリートと現代美術を横断する表現を展開している。



HÖSLAB / 鹿児島大学 細海研究室

2023年 鹿児島県で結成。

建築家・細海拓也が主宰する研究室。「建築と芸術」の連関を研究し、新しい建築と未来の都市のあり方を探求している。

細海拓也

1980年 新潟県出身、鹿児島県在住
2005年 横浜国立大学大学院修了

酒井優一

2004年 広島県出身、鹿児島県在住
2027年 鹿児島大学卒業予定

井上創太

2004年 徳島県出身、鹿児島県在住
2027年 鹿児島大学卒業予定

吉永菘仁

2004年 北海道出身、鹿児島県在住
2027年 鹿児島大学卒業予定



アナイス・カレニン

1993年 ブラジル出身、静岡県在住
2024年 サンパウロ大学現代美術科博士号専攻修了

ブラジル生まれ、近年は日本を拠点に活動。植民地時代以前から伝わる知識体系を研究し、植物との親密な関わりを通して植物と人間との関係性を問い直している。神話や植民地主義の歴史、言語、抽出主義、科学などさまざまな分野を横断してリサーチやフィールドワークを行い、香りやサウンドといった五感に訴える包括的な表現方法で、植物-石-物を新たな姿で捉える作品を制作している。

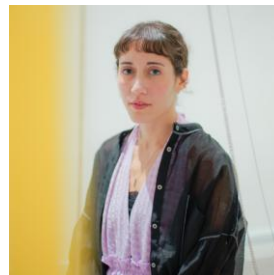


Photo by Marisa Srijunpleang

松井照太

1994年 京都府出身・在住
2018年 京都市立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻卒業

石の自然美や重さ、質量に関心を寄せ、山や川で採集した無加工の石を用いた立体作品を制作している。彫刻において不可避な重力や重量、支持という条件に向き合い、石と支持体とのバランスを通して、重力が可視化される状態を探求している。制作の背景には石を愛でる文化である「水石」への関心があり、現代的なマテリアルを用いることで、石と空間との関係性を捉え直し、新たな鑑賞のあり方を提示している。



hohobun

1997年 東京都出身・在住
2021年 多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業

多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業後、アニメーション作品はイギリス、オーストラリア、台湾などを中心に海外、国内で上映される。家族の死や幼少期の記憶をきっかけに、小さな生物たちの短い生について考察しながら、人の倫理と生物の本能のあいだにある揺らぎを、細胞に見立てた細かなパーツのコラージュで装飾的作品を制作している。アニメ、広告、書籍、舞台、背景美術、グッズなどディレクションも含め多様に活動。

- ・TVアニメ「葬送のフリーレン」第一クール エンディング
- ・SEVENTEEN 「Tiny light」MV
- ・Netflix「BEASTARS FINAL SEASON」Part2 エンディング
- ・公益財団法人クマ財団 4.5期生採択・文化庁メディア芸術祭審査員推薦作品 など



《特別寄託作品》

草間彌生

草間彌生(Yayoi Kusama)は、絵画、彫刻、インスタレーション、映像、パフォーマンス、小説など、多岐にわたるメディアを駆使しながら、「自己消滅(self-obliteration)」という芸術的信条を一貫して探求してきた、日本を代表する前衛芸術家です。

幼少期より幻視や幻聴を経験し、それらを網目模様や水玉といった反復的モチーフとして作品化するようになります。1957年に渡米後、ニューヨークのアートシーンで活動を本格化。初期のネット・ペインティング(Infinity Net)や、布製の突起物で家具や衣類を覆うソフト・スカルプチュアを皮切りに、鏡や電飾を駆使した没入型インスタレーション、裸体によるストリート・パフォーマンスなど、形式を越えた表現を次々に展開。60年代のポップアート、ミニマルアートといった文脈とも交錯しながら、草間は自らの身体性と内面世界を起点とする特異な実践を確立していきます。



帰国後も創作は止まることなく、特に2009年に開始した絵画シリーズ《わが永遠の魂(My Eternal Soul)》では、12年の間に800点以上の作品を制作。鮮やかな色彩と象徴的モチーフを用いながら、自身の心象世界と宇宙的イメージを融合させるような絵画空間を築き上げました。2021年からは《毎日愛について祈っている(Every Day I Pray for Love)》と題した新シリーズに着手するなど、キャリア80年を超えてなお精力的な制作活動を続けています。

草間の作品には、没入感、内面と外界の境界の消失、存在の拡張といった体験的側面が顕著です。彼女のインスタレーション作品、特に《Infinity Mirror Room》シリーズは、世界各地の美術館で長蛇の列を生み出すほど圧倒的な支持を集めており、その詩的かつ執拗な世界観は、現代における「見ること」「在ること」の根源を問いかけています。

【略歴】

1929年 長野県松本市生まれ
1957年 単身渡米、翌年ニューヨークで活動開始
1973年 帰国後、東京を拠点に制作を継続
2016年 文化勲章受章
現在 東京在住

【主な個展】

2025年 「Yayoi Kusama: Retrospective」 バイエラー財団(バーゼル)
* 巡回予定: ルートヴィヒ美術館(ケルン)、ステデリック美術館(アムステルダム)
2024年 「Yayoi Kusama: Infinite Love」 サンフランシスコ近代美術館(サンフランシスコ)
2023年 「Yayoi Kusama - You, Me and the Balloons」 Aviva Studio(マンチェスター)
2022年 「Yayoi Kusama: 1945 to Now」 M+(香港) * 巡回: グッゲンハイム美術館ビルバオ、セラルヴェス財団(ポルト)
2022年 「Yayoi Kusama: My Soul Blooms Forever」 カタール・ミュージアム(ドーハ)
2021年 「KUSAMA: Cosmic Nature」 ニューヨーク植物園
2021年 「Yayoi Kusama」 グロピウス・パウ(ベルリン) * 巡回: テルアビブ美術館
2017年 「Infinity Mirrors」 ハーシュホーン博物館と彫刻の庭(ワシントンDC) * 巡回: シートル美術館、ザ・ブロード(ロサンゼルス)、トロント美術館、クリーブランド美術館、ハイ美術館(アトランタ)
2017年 「Yayoi Kusama: Life Is the Heart of the Rainbow」 ナショナル・ギャラリー・シンガポール * 巡回: クイーンズランド州立美術館(ブリスベン)、Museum MACAN(ジャカルタ)
2017年 「草間彌生 わが永遠の魂」 国立新美術館(東京)
2015年 「Yayoi Kusama」 ルイジアナ近代美術館(デンマーク) * 巡回: ヘニー・オンスタッド・アートセンター(オスロ)、ストックホルム近代美術館、ヘルシンキ市立美術館
2011年 「Yayoi Kusama」 ソフィア王妃芸術センター(マドリッド) * 巡回: ポンピドゥー・センター(パリ)、テート・モダン(ロンドン)、ホイットニー美術館(ニューヨーク)
1998年 「Love Forever: Yayoi Kusama, 1958-1968」 ロサンゼルス・カウンティ美術館、ニューヨーク近代美術館、ウオーカー・アート・センター(ミネアポリス)、東京都現代美術館
1993年 第45回ヴェネツィア・ビエンナーレ 日本館代表(ヴェネツィア)
1989年 「Yayoi Kusama」 オックスフォード現代美術館(オックスフォード) / Center for International Contemporary Arts(ニューヨーク)
1952年 草間彌生 初個展(日本、松本)

【主な所蔵先】

M+(香港)
Museum MACAN(ジャカルタ)
グッゲンハイム・アブダビ
グッゲンハイム・ビルバオ
テート(ロンドン)
ポンピドゥーセンター(パリ)
ルイジアナ近代美術館(デンマーク)
ニューヨーク近代美術館(ニューヨーク)
ナショナルギャラリー(ワシントンDC)
東京都現代美術館
他多数

開発さんの小屋

(1組)

アーティスト開発好明が作品を展示している小屋です。
※「アスレチックパークGREENIA」上りバス停前

開発好明

1966年 山梨県出身・在住
1991年 多摩美術大学美術学部絵画科油画専攻卒業
1993年 多摩美術大学大学院美術研究科修士課程修了

観客参加型の美術作品を中心に、2004年にヴェネチア・ビエンナーレ第9回国際建築展、2006年に妻有トリエンナーレ「越後妻有大地の芸術祭2006」に出品。2016年に市原湖畔美術館にて「中2病展」を開催。2024年「開発好明 ART IS LIVE—ひとり民主主義へようこそ」展を開催。また国外では、ベルリンのニューナショナルギャラリーにて「Berlin-Tokyo/Tokyo-Berlin」などに参加し国内外で発表を行っている。2011年以降デイリリーアートサーカスを企画し震災によって被害を受けた学校や仮設住宅に訪問して展示やワークショップを行った。



六甲ガーデンテラスエリア

(7組)



山頂付近・標高約880mに位置する日本有数の眺望スポット。1日の終わりに1,000万ドルの夜景を楽しむのもおすすめ。レストランも3店舗併設し、喫茶・お食事を楽しめます。エリア内のセレクトショップ「ホルティ」は芸術祭のオフィシャルアートショップ。芸術祭オリジナルのお土産やアーティストが手掛けたグッズを販売します。

鈴木泰人

※プロフィールはP.3に掲載

佐川好弘

1983年 大阪府出身・在住
2005年 大阪芸術大学短期大学部専攻科修了

漫画の飛び出す文字の立体表現やインタラクティブな作品を手がけるほか、パワースポットを作品として展開するなど、人の感情に関わる事象を起点に、思わず体感したくなる作品を制作。現代の信仰心や価値の在り方を、ユーモアと批評性をもって再構築する。



竹本真治

2002年 愛媛県出身、東京都在住
2025年 武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業

2025年大学卒業、その後会社員として働いたから制作活動開始。現在は店舗の内装設計を行っています。
ペットボトルなど身近なものを素材とし、無機的なものに命を吹き込むように有機的な表現をしています。
自然体なものが好き。記憶のどこかでこびりついているような好奇心だったり、忘れかけていた懐かしい思い出の引き出しを開けてしまうような優しく繊細でも、力のある表現を目指して模索しています。



四方謙一

1983年 京都府出身・千葉県在住
2007年 早稲田大学芸術学校建築設計科卒業

早稲田大学芸術学校在学時より、野老朝雄氏に師事。光や素材を用いて「場」の構造を顕わにし、環境や状況の変化と観覧者が相互作用する装置として、彫刻、インスタレーション、写真などの作品を制作する。これまで、越後妻有 大地の芸術祭 冬、東京ビエンナーレ、奥能登国際芸術祭、UBEビエンナーレに参加。主な作品に、MIYASHITA PARKでの「Flowing time reflecting on the river」、大阪国際空港の6作品群「GLOWING GROWING GROUND」がある。



Photo by 近藤央希

開発好明

※プロフィールはP.12に掲載

わにぶちみき

1981年 大阪府出身・在住
2004年 近畿大学文芸学部芸術学科卒業
2012年 英国ボーンマス芸術大学大学院美術修士課程修了

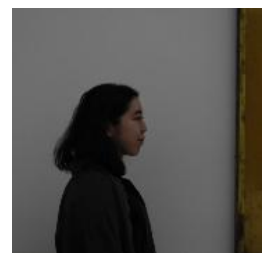
わたしは「風景から色を抽出する」という一点にだけフォーカスした、極限まで抽象化された「風景画」を描きます。それは、ITの発達した現代社会における風景の見方に対する問題提起であり、誰でも簡単に記録・閲覧することができるようになった「風景」の本質に気づききっかけとしての作品を目指した制作です。



reiko tsubota

1999年 長野県出身、東京都在住
2021年 早稲田大学創造理工学部建築学科卒業

石上純也建築設計事務所を経て、2025年からreiko tsubota architects、Chikei Hara (Researcher/Independent Curator)+Reiko Tsubota(Architect)として東京を拠点に活動。建築コレクティブGROUP メンバー。建築設計を軸として空間の設計や制作を行う。一級建築士、管理建築士。



自然体感展望台 六甲枝垂れ

(3組)



六甲山上で最も標高の高い*展望台。最大標高888mからのパノラマビューは淡路島から大阪平野、関西国際空港まで及び、夜には「1,000万ドルの夜景」へと変化します。

*自社調べ。

木村崇人

1971年 長野県生まれ・在住
2003年 東京藝術大学 博士課程修了

「地球と遊ぶ」をテーマに、風や光などの自然現象を利用した体験型作品やワークショップを国内外で展開している。人々が常識として理解している世界の姿と、科学的に観測される実際の現象とのあいだにあるズレに着目し、自然現象を素材としたインスタレーションとして可視化する。作品体験を通して、身近な自然やエネルギー、地域との関係を見つめ直し、人間が自然の一部として存在していることへの気づきを促す表現を行っている。



岩谷雪子

1958年 北海道出身、高知県在住
1981年 武蔵野美術大学造形学部日本画科卒業

植物を地球上で共存する最も重要な存在の一つと捉え、展示場所周辺に生きる植物を採集し、立体やインスタレーション作品を制作している。植物から受け取った感覚をできるだけ損なわぬよう気を付けながらアートとして再構成することで、我々の周りに実は存在している多くのものたちを感じる場を作っている。近年は、その土地の植物を採集するだけでなく、リサーチを重ね、土地の記憶をすくい取るような制作も行っている。



大東真也

1995年 滋賀県出身、大阪府在住
2020年 京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程芸術専攻修了

私はガラス瓶を溶かすことで作品制作を行っている。既製の工業製品である瓶を、熱と重力という自然の作用に委ね、形態や機能を解体し、素材へと還す過程を提示する。複数の瓶が溶け合い積層する塊や、宙吊りの瓶が変形し地へ降り立つ現象は、形が失われながらも存在が連続する状態を示している。そこに死と再生、生まれ変わりという循環の感覚を重ねている。



風の教会エリア

(14組)



通常是非公開である安藤忠雄設計「風の教会」を会期中限定で展示会場として公開するほか、かつて教会とともにあった旧六甲オリエンタルホテルの跡地の広場と2022年に営業を終了した「旧六甲スカイヴィラ」に作品を展示します。

加治聖哉

1996年 新潟県出身・在住
2018年 長岡造形大学造形学部美術工芸学科卒業

大学在学中より多くの地域に作品を提供。大学卒業後は村上隆のスタジオにて就労、その後廃材を用い原寸大の動物を創るアーティストとして独立。2023年にアトリエ「sokoso-ko」を開設。工務店や飲食店などから譲り受けた、木の廃材にこもる人の軌跡を受け継ぎ、血が巡り、筋肉が収縮し、毛がなびく動物へと生まれ変わらせている。大工だった祖父より受け継いだ技術で強度と造形美を実現している。



正元嶺至

1994年 兵庫県出身、大阪府在住
2017年 大阪芸術大学芸術学部工芸学科卒業

鉄を用いて立体作品を制作。
兵庫県の陶芸家のもとに生まれ、物心ついた時から粘土に触れ、またアニメにも興味を示しそれらが生活の一部であった幼少期を過ごす。近年は、自身の人格形成を担う要素を組み合わせ、文明的な人間像の生成過程とすり合わせながら鉄を用いて人体像を造形する一連の行為から、「自身とは何かを問いながら価値を更新し続ける生成途中の人間らしさ」を垣間見ようと試みている。



棚田康司

1968年 兵庫県出身、神奈川県在住
1995年 東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了

2001年に文化庁芸術家在外研修員としてドイツ・ベルリンに滞在し、その後も2015年にインドネシアやシンガポールで滞在制作を行うなど、異なる文化圏での経験を重ねてきた。制作の軸には一貫して木彫があり、日本古来の技法である「一木造り」によって人間像を彫り続けている。その作品は、大人と子ども、人間と自然、個人と社会といった境界線の「あいだ」に立ち現れ、無限の広がりを感じさせる。



Photo by Kazumi Kiuchi

伊藤大寛

2000年 奈良県出身、大阪府在住
2025年 広島市立大学大学院芸術学研究科彫刻専攻 修了

「愛と彫刻」をテーマに自身の体験、経験談や歴史上の人物にインスピレーションを受けながら作品を制作している。



Photo by Nagisora

野田満

1985年 兵庫県出身、大阪府／兵庫県淡路島在住
2016年 早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻博士課程修了

大学で建築学を専攻のち、地域デザインやまちづくり分野の研究や教育、現場支援等に従事。これらの取り組みの裏側にある自己省察と社会批評を発現すべく、アーティスト活動を開始。地域に根付く文脈や造形、コミュニティへの深い造詣に基づく、社会性／物質性の両面においてリレーショナルな、かつシニカルな表現活動を展開している。



佐藤圭一

1966年 東京都生まれ・在住
1994年 東京藝術大学大学院彫刻専攻修了

アイデアはいつも情景として頭の中に現れます。その情景を造形上の問題を解決しながら、設定に合わせ忠実に再現することが私の制作です。私にとって作品とは自己表現というよりも、「勝手にそこにいるモノ」という感覚を強く持っています。制作したのは確かに私なのですが、その事とは別に、特に展覧会などでは強くそう感じてしまいます。そして、それらの「いる場所」では私の意図するしないに関わらず生き活きとした時間が流れてゆき、私はそれをいつも憧れのような気分で眺めてしまいます。今回の作品も六甲山の開放的な空気の中で贅沢な時間を過ごしてくれればと願っています。



鈴木きか

1998年 東京都出身、神奈川県在住
2023年 東京藝術大学大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻修了

陶芸を基盤に、土・糞・骨・乳・野草などを扱うアーティスト。作品制作、ワークショップ、フィールドワークを横断しながら活動している。出歩き、採集し、摂取し、排出するといった身体の循環や、練る、焼く、編むといった反復的な行為を通して、身体と大地、生と死、聖と穢れの境界を往還する制作を行う。現代において見えにくくなった、身体を通して世界と関わる感覚や時間の回復を探っている。



鴻崎正武

1972年 福島県出身、神奈川県在住
2006年 東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻油画修了

日本画の伝統的技法を基盤に制作する画家。中国古代の理想郷「桃源郷」を起点に、南蛮屏風や洛中洛外図、ヒエロニムス・ボスなどの構図や金地表現を参照し、幻想的な動植物や異形の存在を描く。東日本大震災以降は、赤べこやこけしなどのモチーフを用い、「東北画」の可能性を問いながら、土地の記憶や文化を再解釈してきた。近年は屏風にとどまらず、円形画面や立体表現へと展開している。



内田望

1987年 神奈川県出身、東京都在住
多摩美術大学大学院美術研究科工芸専攻修了

鉄を主素材に鍛金技法で動植物をモチーフとした彫刻を制作するアーティスト。生物が本来持つ特殊な能力と、人間が生み出した科学技術的装置を融合させることで、生物の機能や存在の魅力を機械的な造形として表現している。



中野信子

1975年 東京都出身・在住
2023年 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻博士後期課程ABD

脳科学者、評論家、医学博士。東京大学工学部応用化学科卒業、同大学大学院医学系研究科脳神経医学専攻博士課程修了。東日本国際大学教授、京都芸術大学客員教授。脳科学の知見をもとに評論・メディア活動を行う一方、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科博士後期課程を2023年に修了。科学とアートの関係性を探究し、2022年より脳波を用いた展覧会の企画・キュレーションにも取り組んでいる。



チュアン・ホー

1985年 台湾台北出身・在住
2014年 台北芸術大学大学院ニューメディアアート専攻修士課程修了

アニメーション・アーティスト。手描きアニメーションの特性を拡張することを実践の中心に据え、その制作に伴う禁欲的とも言える労働性や、時間と空間の中で蓄積されていく感情の在り方を探究している。2019-2025年、中之条ビエンナーレ参加アーティスト。2024年には、フルドーム映像作品《Demo: Dome》をメルボルン、イエーナ、プラハなどの国際的なフェスティバルで上映。



仲順れい

1983年 兵庫県出身、大阪府在住

2005年 宝塚造形芸術大学ビジュアル&アドバタイジング(V&A)コース卒業

2001年、大学在学中に切り絵制作を始める。

卒業後、約1年間ロンドン芸術大学にてアートを学ぶ。

女性・人体・昆虫・植物を主要なモチーフとし、繊細なドローイングを切り絵へと昇華させる独自の手法で制作。精神性や死生観に加え、現代社会のリアルを扱う作品も展開している。



伊藤幸久

1981年 東京都出身、石川県在住

2013年 金沢美術工芸大学大学院美術工芸研究科博士課程満期退学博士(芸術)学位取得

彫刻家。陶やFRPによる人物像を中心に制作している。素材の意味性や場の特性を重視しながら、人物が置かれる状況を探求する。鑑賞者が他者を見て誤解しながら把握し、関わっていくように、作品を見てもらうことを考えている。近年は植物やAR(拡張現実)を用いた展示にも取り組み、彫刻の可能性を広げる試みを続けている。



梅沢和木

1985年 埼玉県出身・在住

2008年 武蔵野美術大学映像学科卒業

美術家。インターネット上に散らばる画像を再構築し、圧倒的な情報量に対峙するときの感覚をカオス的な画面で表現する。瀬戸内国際芸術祭、Reborn-Art Festivalなどの芸術祭に参加。東京都現代美術館、森美術館、豊田市美術館、リトアニア国立美術館などに收藏。CASHI所属。



六甲山サイレンスリゾート（旧六甲山ホテル）

(3組)



昭和初期から長年愛され、2017年に閉館した旧六甲山ホテル(近代化産業遺産)が、建築界の巨匠ミケーレ・デルルッキのディレクションにより修復、2019年にリニューアルオープンしました。作品展示場所は「旧館」と、道を隔てたレストラン「空のダイニング」店内です。

佐々木里桜

2000年 神奈川県出身・在住
2025年 武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業
2025年 武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻彫刻コース入学

首像をモチーフに、生きている人の存在感を制作している。自身の記憶の中に色濃く存在する人物像をモデルとすることで、人の内側を捉え、彫刻として表現する。それにより、人の形を逸脱しつつ、その人らしさを見出し、既存の形にとらわれない人の姿が現れる。

また、ブロンズの casting という属性のエネルギーを借りた素材と技法は、大きな生命力を内に抱いており、首像の存在感を表現するのに欠かせないものになっている。



Photo by Kana Sun

《特別展示》

Michele De Lucchi(ミケーレ・デ・ルッキ)

建築家、デザイナー、アーティスト。アルキミアとメンフィスの中心メンバーで、1988年から2002年までオリベッティのデザイン・ディレクターを務める。1987年にコンパッソ・ドーロ賞を受賞。数多い照明の中で、世界的に販売総数第一位とされるアルテミデのランプ「トロメオ」は代表作のひとつ。イタリアやヨーロッパの有名企業の家具デザインを担い、世界各地で建築プロジェクトを実現。現在も文化施設、オフィスビル、工業施設、邸宅など、世界中の建築プロジェクトを手がける。



伊藤幸久

※プロフィールはP.18に記載

本リリースに関する問い合わせ

六甲山観光株式会社 神戸六甲ミーツ・アート事務局

TEL:078-891-0048(平日9:00~18:00)

HP: <https://rokkomeetsart.jp/>



公式Webサイト